



日社大は、2016年に創立70周年を迎えました。

このことに関して、本学及び本学同窓会はそれぞれ記念式典を開催しました。本学の記念式典には村上会長が招待され、同窓会と学生自治会主催の記念式典には、「社大創立70周年記念の検証」として、木村副会長がシンポジストとして招かれました。今号より、木村副会長のシンポ発言を3回に分けて掲載します。お楽しみに！

【社会福祉随想リレー】

## 社大創立70周年記念「障がい者福祉の立場からの検証」 その1

学部9期 木村 昭一 (社会福祉法人はるにれの里理事長)

### 1. これまでの道のり

卒業して47年が経ち、第9期生の私も人生70周年に入りました。

私が在学した1965（昭和40）年から1969（同44）年の社大生をめぐる時代背景は、世間では60年安保がようやく落ち着き始め、東京オリンピックのお祭り騒ぎもまだ冷めやらぬときでした。また、60年安保闘争の挫折から抜け出せないでいた一部学生の過激な運動が、70年代学園紛争へとつながっていく時代でもありました。

経済環境も戦後復興経済から高度経済成長期に入り、雇用環境も比較的恵まれ始めていた時代となっていました。しかし他方、福祉については経済成長から取り残され、朝日訴訟・堀木訴訟などの権利訴訟があらこちらで起きていた時代でもありました。

当時の学生は様々な社会問題や政治課題に目覚めて授業にも出ず学生運動に明け暮れる学生、家からの仕送りをもらえずにアルバイトに専念している貧乏学生、サークル活動に学生生活のすべてを投入している者、黙々と授業のみに専念している者、と様々でした。

私はどちらかというと、ほとんど授業に出ないでアルバイトと学生運動に明け暮れていたような気がします。

こうした中で、私が社大の学生生活を通して学んだものは二つです。その一は、誰から学んだというよりも、社大の4年間の学生生活全体を通して、「徹底して社会的な弱者である福祉の対象者の立場に立つ」ということであり、その二は、「権利としての社会福祉、社会保障を学ぶ」ということでした。

当たり前といえば当たりのスタンスではあるものの、自分のことで精いっぱい灰色の受験戦争から抜け出したばかりの若者にとって、それは極めて新鮮なものだったのです。

大学を卒業後、一旦は首都圏の公的福祉に携わるものの、そこに馴染むことができず、今でいうところの「3年以内の離職率の高さ」を当時から表出していた私でありました。卒後2年目にして出身地である北海道に戻り、当時としては最も過酷な福祉労働を求められていた重症心身障がい児施設に飛び込みました。しかし、寄らば大樹の社会福祉法人でもあり、消化不良気味ながらも、19年間お世話になりました。

その後、自閉症児者を我が子に持つ親たちで作った小さな社会福祉法人「はるにれの里」に飛び込み、以来25年が経ち、現在に至っています。

はるにれの里は30年前に設立されました。保護者たちの熱い思いと運動で、札幌から北へ50キロ程の過疎地・厚田村に、知的障がい者入所施設「厚田はまなす園」として誕生したのです。そこは、激しい行動障がいを表出しながら、思春期及び成人期を迎えた重度自閉症の人たちばかりであり、当時では家庭での介護はもちろん、教育からも、福祉からも、時としては医療からも見放された人たちの施設でした。

また、スタート当時から利用者処遇面でも、人事面でも、経営面でも混乱をきたし、開設5年目にしてすべての面で行き詰っていたのです。

私は、当時の社大北海道同窓会の副会長、今は亡き若狭幹夫先輩の命をうけ、1991（平成3）年10月に、そこに飛び込むこととなったのです。利用者たちは、自傷、他害、破壊、激しいこだわり、奇声、不眠、多動など、ありとあらゆる行動面の不適応行動のオンパレードでした。毎年のようにダイルームの大型テレビを複数台買わなければならないとか、月に1回は救急車が園の玄関に横付けされるという現実には唖然としていた自分を今でも思い出します。

彼らは何故こんなに荒れるのか、困惑の日々の中で私がまず最初にドアを叩いたのは、今は亡き恩師・石井哲夫先生のところでした。当時、石井先生は千葉県袖ヶ浦の社会福祉法人「嬉泉」で自閉症の入所施設を運営していました、学生時代はあまり教を乞う機会は少なかったのですが、自閉症児者たちの混乱の解決の糸口を見つけるべく、先生が主催するセミナーに参加したり、直接助言をいただいたりしました。

先生から学んだことは、いかに激しい行動障がいを表出しても、一人の人間であることには変わりない。だから、彼らの行動を受容しながら、しっかりと寄り添うことであるということでした。こうして、石井先生から自閉症者と向き合うための基本を学ぶことができたのです。（以下、次号へ）

## 日社大市民公開セミナー&道同窓会秋季セミナーin 釧路を終えて

現地事務局長 豊島 節子 (学部20期)

10月22日(土)の釧路は、曇り空。

釧路川右岸の幣舞(ぬさまい)橋袂にあるセンチュリーキャッスルホテル3階孔雀の間では、開始時刻の14時には、約110人が着席していました。

事前に配布した地元向け案内用チラシには、「今、子どもの社会福祉はどう進められているのでしょうか。今回の日社大市民公開セミナーでは、本学の金子恵美教授に、このことの現状と課題について講演してもらいます。(中略)子どもへの思いを馳せ続ける皆様の積極的なご参加を心よりお待ちしております。」という一文を載せました。

まず、この呼びかけに応じてくれたのが、釧路市民生委員児童委員協議会でした。当日はなんと55人の参加。また私立保育園連合会、私立幼稚園連合会を通じて保育園と幼稚園に案内をした経緯もあり、保育士及び幼稚園教諭はもとより、子育て支援センターや児童発達支援センター、さらには児童相談所からの参加もありました。

飛行機の到着遅れによる予定変更を余儀なくされたため、まずはシンポジウムを行うこととしました。

三上道同窓会副会長の進行により、保育園長の北構和代さんの発表「子どもたちの今、保育園だからできること」から始まりました。自身が「子育てされた体験のない」母親とその子どもへの関わり等について、事例を通してお話しくださり、改めて保育所の役割の重要性を考えさせられました。

二番手の戸田竜也さんは、「スクールカウンセラーの立場から」と題して、「こころの問題」として矮小化できない課題増加の現実と、ヤングケアラーになっている子どもの事例から、課題の複雑さを話してくれました。他方、大人が立場を超えてアンパンマンファミリーになれば、この地域の子どもたちの未来が見えてくるとも。

最後は、同窓会員の小林暉親さんの「発達障がい児の親支援を通してみる 子どもの今」です。高齢者問題は子育ての問題でもあり、障害児の問題は家族の問題でもあるという切り口から、障害児の親の自己評価の低さを高めるための親とのおしゃべり会という旭川の実践例を具体的に紹介してくれました。

シンポジウムの途中で、金子教授が到着しました。

その基調講演「子ども子育て支援法施行2年—今こそ子どもの福祉を考えよう—」では、参加者の職種や立場などを随所で意識しつつ、特に民生委員児童委員に対して、ワーカーとの二人三脚で解決に至った事例を挙げ、参加者を勇気づけました。また重要なのは、「顔が見える関係性」、「大人が立場を超えて手を繋いで子どもを支援していくこと」であると強調していました。「この釧路の地では手がもう既に伸びている、指が触れ、繋がるまであと少しであり、アンパンマンファミリーになれる！」という強いメッセージを残してくれました。

子どもの最善の利益を考える人々で埋まった会場は、最後まであたたかな空気が流れていました。

懇親会は場所を変え、釧路市郊外の温泉で実施しました。

社大関係者は同窓生を含め13名と少なかったものの、地元の関係者の参加も得て、22名で賑やかに開会しました。

村上会長の挨拶に続き、釧路市社協の小野事務局長が乾杯の発声。

その中で、ご自身は日本福祉大卒、民児協副会長は東北福祉大卒、釧路社会的企業創造協議会副代表は北星学園大学卒であると紹介され、「同窓会の枠を超えての社大同窓会は素晴らしい」と称賛してくれました。

盛り上がった2時間の懇親会の締めは、学部4期の桑原さん。在学中の60年安保闘争や樺美智子さんにも触れ、「今も一貫してその時の立ち位置を変えずにいる」とのお話には、身の引き締まる思いがしました。

思えば、去年のセミナー開催地であった白金温泉での懇親会の席上、村上会長から「来年は釧路で！」とお声掛けがあったのでした。

事務局から離れた地での開催であったこともあり、みなさまには様々なご迷惑をお掛けしました。

しかし、地元参加者の「大変良かった」、「とても勉強になった」、「保育園として児童委員と日常的に連携を取りたい」などの後日談をここに紹介して、セミナーin釧路の報告とします。

ご協力いただいたみなさま、ご参加くださったみなさま、本当にありがとうございます。改めて、心よりお礼申し上げます。

## 恒例・2017年新春セミナーを開催しました

ここ30年以上に亘って開催されている北海道同窓会新年会（現「新春セミナー」）を今年も、1月28日（土）に、札幌市内の「みんなでこれるもん・札幌駅西口前店」に於いて開催しました。出席者は10人でした。

まずは新春学習会として、木村副会長が、社大70周年記念イベントについて、以下のような報告をしました。

その1は、6月に行われた社大福祉フォーラム2016のシンポジウム（詳細は、『社会事業研究56号』参照）についてです。

発言者の内容は、社大の在るべき姿を論理化し、社会福祉実践しているのが特徴であるとして、研究誌の熟読を勧めました。

その2は、同窓会と学生自治会による「社大70年の検証」であり、それぞれの検証を通して、①社大は人生の通過点ではなく、人生の原点である、②社大生としての横の繋がり、絆の確認ができた、③社会福祉の原点を校歌から学べる、ということでした。またこれからの社大の役割として、地域づくりのための創造的な力を発揮できるソーシャルワーカーの養成が必須であるということも再確認できました。

その3は、11月5日の本学記念式典であり、特に特別講演（姜尚中氏）は参加者

の胸を打ったとのことでした。

続いて2017年定期総会に入り、瀬戸さんを議長に進行しました。金子事務局長が、2016年会計報告及び市民公開セミナー会計報告、会計報告に関する監査報告（代読）を行い、併せて2017年の予算案を提案しました。2016年事業報告及び2017年事業計画については高田さんが報告及び提案をしました。

論議の中では、今年も開催予定の「就活・北海道フェア」について積極的な意見が出され、また秋季セミナーに関しては後述のような方向性が確認されました。

以上を踏まえ、議案はすべて、出席者の全員一致で承認されました。

総会後は、懇親会に入り、村上会長が新年の挨拶をしました。この中で会長は、「就活・北海道フェア」に触れ、同窓会自身がもっともっと本学に果たす役割はあるのではないかと強調しました。また、毎年開かれている秋季セミナー（「日社大市民公開セミナー」）を今年も成功させることで、社大の意気を示そうと提案しました。

そして、会長の音頭で乾杯し、懇親会に入りました。

このたびの新春セミナーには、懐かしい人（浪江さん）のほか、いつものメンバーに加え、今年も倉田先生や白井さんも参加。懇親会冒頭、それぞれが自己紹介や近況報告をしました。

懇親会では、いつも通りの懐かしい話に花が咲きました。

また、木村さんの報告にあった「力量あるソーシャルワーカーの養成」についても、多くの意見が出されました。

北海道同窓会としてはこの間、本学同窓会に対して、以下の提案を行ってきています。

- ① 生徒の入学にあたっての県支部単位での推薦制度の創設
- ② 実習等に関して、大学側からの積極的要請と法人等の積極的受入れ
- ③ 大学による求人票の依頼と、同窓会主導による就活フェアの毎年実施
- ④ 大学による法人等への就職推薦制度の創設

このことは、社会福祉理念が必ずしも明確となっていない教育現場に良い影響を与えるとともに、学生及び社会福祉現場自体が、ともに力価を向上させていく仕組みであると考えています。

こうした地道な取組みにより、社大が本来果たすべき役割をより強めていくと同時に、社会福祉現場の力価向上にも社大が寄与できるようにしたい、という願いが北海道同窓会の中にはあります。

ただ、こうした中、1枚のチラシが関心を集めました。それは、「持続可能な社大をめざして」という集会在清瀬において開かれた（1/21）、というものです。

チラシの中には、専横的な人事の横行、教授会議事録の改竄、科研費の不正流用、天下りの常態化など、聞き捨てならない内容が書かれていました。これが本当であるならば、70年を迎えた社大の危機ともいえます。ただ現状では、真偽の程は不明確です。

道同窓会としてはまず、社大生（社大卒業生）という矜恃を持って、自らの現場の力価向上に努めようということを再確認し、秋季セミナーでの再会を約したのでした。

## 2017年秋季セミナー&日社大市民公開セミナーの開催

前述の総会において、以下のことを決定しましたので、まずは報告します。

1. 実施日…9月から10月の土・日2日間
2. セミナー会場…美唄市
3. 現地担当…高島さん等

具体的な内容づくりは、今後適宜進めていきたいと考えています。

ただ、今回の話し合いの中では、例えば、「地域に応えるソーシャルワークの役割を考える」とか、「力のあるソーシャルワーカーの養成と地域共生の形成をめざして」というようなテーマが主力になるのではないかと考えられます。

今後、社大への講師派遣も含め、社大だけではなく、美唄市を中心とした社会福祉系大学卒業生や地域の諸組織との協力も得ながら、具体化を進めていきたいと考えています。

なお、詳細は今後、現地実行委員会を開催して、日程を含む骨格を決定し、逐次「アガペ」でお知らせしていきます。

### 『社会事業研究56号』を読んでみては！

学内学会に入っているため、随時この雑誌が送られてきます。ただ、いつもはパラパラと読み流す程度で、積極的な読み方はしてきませんでした。編集の方、ゴメンナサイ。

ただ今号は、社大70周年記念号とも云うべきものであり、「変革する力：力量あるソーシャルワーカーへの途」とあって、まずはシンポの記事を読みました。

社大の後輩である岡部さんが司会をし、北星の白沢先生のゼミ生であり、村上会長の知り合いでもある櫛部さんが社会福祉実践した内容を報告しており、大橋元学長が社会福祉実践の歴史的理論的考察（白沢先生の「生活力形成」にも言及しています）を行い、潮谷理事長が当時の社大の教育を通して、今日の社大の社会福祉教育への提言を行うという、とても読み応えのある内容でした。

このシンポの当日は、「就活・北海道フェア」で同じ社大内にいただけに、本務があってシンポ出席が叶わなかったことが、今となってはとても残念でした。

兎に角、4人の方々のご発言は、今日の社会福祉実践に関して、とても示唆に富んだ内容であり、ゆっくりと咀嚼してみる価値がある（先輩に対して失礼な言い方！）と感じ取ったものでした。

我々社大生は、「清く、正しく、美しく、社会福祉現場の底辺で、しっかりとした社会福祉実践をしよう！」と誓い合って社大を卒業しました。また、現場に出てからも、社大卒という矜持を胸に、一所懸命に社会福祉実践をしてきました。

このことは、どうしても現在の社大に継承していかなければならないことであり、そこにこそ、同窓会の意義があるとも考えています。

なお本号には、「就活・北海道フェア」の記事も掲載されていますヨ。（た）